

**P-005****早産児の離乳期における親の経験**

藤塚 真希、植木 慎悟、諸隈 誠一

九州大学大学院 医学系学府 保健学専攻

**【目的】**

早産児は吸啜・嚥下経験の制限や治療・処置の嫌悪経験によって、哺乳・摂食機能が未熟となり、NICU退院後の在宅生活において離乳が円滑に進まないことが問題となる。支援を検討するために、親がどのように児の状態を認識し、判断して、離乳を進めているのか明らかにする必要がある。本研究は、早産児の離乳期における親の経験を調査することを目的とする。

**【方法】**

修正24ヶ月未満で、離乳開始から2ヶ月以上経過している早産児の親を対象に、インタビューガイドを用いて半構造化面接を行った。面接内容から逐語録を作成し、質的帰納的分析を行った。本研究は所属機関の倫理審査委員会の許可を得て実施した。

**【結果】**

対象者は母親9名であった。児の出生時の在胎週数は平均 $29.7 \pm 4.4$ 週、体重は平均 $1136 \pm 600$ gで、面接時の修正月齢は平均 $15 \pm 4$ ヶ月であった。分析の結果、619コードが生成され、27サブカテゴリー（以下<>で示す）、7カテゴリー（以下【】で示す）が抽出された。

早産児の親は、<月齢や身体発達など何を基準に離乳を開始すべきか判断が難しい><固体物の咀嚼・嚥下へのステップアップが難しい>など【一般的な離乳の進め方に当たはまらない難しさ】や、<体重が成長曲線に沿って順調に増加しているか神経質になる>など【成長発達への焦り】を感じていた。このような摂食の難しさに対し、<まずは身近にいる地域の保健師や栄養士、訪問看護師に気軽に相談したい>など【専門職者へのタイムリーな相談を切望】するとともに、<栄養士や理学療法士、保育士と食べる様子を共有して、咀嚼・嚥下の評価をしてもらう>など【児の状態に合った方法を専門職者と共に模索】していくことで、<専門職者の見立てがあると自信が持てる>など【専門職者との協働による安心感と自信】につながっていた。また、<家族会で食べない体験を共有し、現状を肯定的に捉える>など【家族や経験者との協力】も活用することによって、親は<月齢以外の指標をみつけて、児のペースを大事にする>など【実際の食べる様子に合わせた離乳】を進めるようになっていた。

**【考察】**

早産児の親は、離乳期に早産ならではの難しさを感じ、児の状態に合った離乳の進め方を模索していた。専門職者が問題をタイムリーに捉え、児の摂食機能から見立てを共有することが、より円滑な離乳や親の安心につながると考えられ、具体的な支援方法を検討していく必要がある。

**P-006****46都道府県のリトルベビーハンドブックのQ&Aの概要—保護者の相談内容と課題の分析—**

菊原 美緒、平良 実咲

名桜大学人間健康学部看護学科

緒言2011年、小さく生まれた赤ちゃんを育てる静岡県の家族がリトルベビーハンドブック（以下LBH）を作成、配布する取り組みが開始された（坂東、2021）。このLBHは、低出生体重児の保護者向けの母子健康手帳のサブブックで、現在、46都道府県7市区に広がっている。本研究は、LBHのQ&Aを分析し、保護者の相談内容と課題を明らかにすることである。方法45道府県と1区（東京都中野区）のLBHを県のHPからダウンロードした。記載がない2県は、郵送で収集した。LBHのQ&Aのページに記載されている項目を『子どもに関するQ』と『保護者に関するQ』に分類し、各々を細分化して整理した。結果LBHのQ&Aの中で『子どもに関する質問』は204件、最多は、「成長と発達」に関する質問であった。特に、粗大運動の発達遅れは、保護者の心配の種になっていた。『親に関する質問』は69件、最多は、「困ったときの相談先」に関する内容が最多であり、退院後の相談先や、生活の準備の質問が多く見られた。考察LBHは、低出生体重児をもつ保護者にとって重要な情報源であり、『子どもに関する質問』保護者の心配に対する精神的なサポートとしての役割も果たしていた。また、Q&Aの回答は、医療従事者だけでなく、家族の体験や声を取り入れることで、互いにエンパワーメントするきっかけになっていた。その効果を最大限に發揮するためには、母親の状況のアセスメントにより、最適なタイミングでLBHを提供することが必要であると考える。そして、『親に関する質問』は、NICU退院後の母親は、仕事復帰を見据えた地域の医ケア保育支援事業等の情報等も求めていた。よって、家族のニーズに応じた地域の行政サービスの情報をカスタマイズし、各自治体の特性を含めたLBHを作成することが必要であると考える。今後の課題は、LBHのデジタル化や地域ごとのLBHの作成を進めることで、より多くの保護者が、より簡単に有益な情報にアクセスできるようになることである。結論LBHは低出生体重児を持つ保護者にとって不可欠なツールであり、そのQ&Aは保護者のニーズを反映している。今後は、LBHの更なる充実と、デジタル化や地域特性への対応を進めることで、より効果的な支援が可能になることが示唆された。